



第32号

さらしな里

友の会だより



2015・春



冠着橋調査隊、好奇心に火がつく

二年前、更級小学校に転勤となり、その不思議な形状に興味をひかれずにはいられなかった冠着橋。地域を学べるよい教材になると考え、担任していた四年一組の子どもたちと一緒に「冠着橋調査隊」を結成し調査することになりました。「冠着橋って、段々になっている不思議な橋だよな」と投げかけたところ、興味関心に火がつき、放課後、家族や近所の方に冠着橋の歴史や、形状の秘密などを自ら調査する子どもたち。中には、新冠着橋の工事現場で働く方々に直接聞きにいく子もいました。

冠着橋の名付け親の小松康孝さん(仙石区)からは「戦争からどり、故郷『更級』のすばらしさを深く感じて、故郷のシンボル『冠着山』がもっとも美しく見える場所なので『冠着橋』と名付けた」と教えていただきました。千曲建設事務所の方を学校にお招きし、お話を聞きしました。その際、新しい冠着橋の工事現場を見学させていただけるという、驚きのプレゼントも。だれよりも早く新しい冠着橋に足を踏み入れさせていただけると知り、子どもたちも大喜びでした。見学会当日は、強い橋を作るための様々な工夫を教えていただいたり、実際にコンクリートを打つ様子を拝見させていただいたりしました。たくさんの方が安全を願って一生懸命働いていることを学びました。舗装前のコンクリートの下地に、チョークで橋への思いや願いも記させていただきました。昨年行われた新冠着橋の開通式では、雨天のため五加小学校での開催となりましたが、開通式後の渡り初めは天候が回復し、無事に行うことができました。雨で濡れているのにも関わらず、道路に大の字になって寝転び、喜びを全身で表現する子どもたち。様々な歴史や人々の想いを知るからこそ姿なのだとうれしくなりました。

子どもたちは、将来にわたり通学や通勤で何百回、何千回と新しい冠着橋を渡ることと思います。「冠着橋」の歴史や、橋にこめられた人々の願いや想い、そして、自分が感じた感動を大切に、いつまでも地域の誇りとしての「冠着橋」を大切にしていける大人に育ってほしいと願っています。

(文と写真)更級小学校・町田祐介

花の吉野と並び称されたさらしな

6月27日にその理由説明イベント



冠着山のすそ野に広がる、千曲市川西地区を中心とした地域を「さらしなの里」と呼び、地域全体を元気にしていくさらしなプロジェクトが始まりました。プロジェクトの推進グループである、さらしなルネサンスの結成総会が3月14日に開かれ、今年度の事業計画が決まりました。

活動の一本の柱である、さらしなという地名の価値と魅力を明らかにする特別企画を6月27日に開きます。桜で有名な奈良の吉野山と、なぜさらしなが並び愛でられてきたのかを掘り下げます。これをテーマにしよう

と思ったのは、更級地区の郷土史家、故塚田哲男さんから軽井沢・追分に「左に行けば吉野の花、右に行けばさらしなの月が楽しめる」と記された道標（分かれの碑）があることを教えてもらったのが始まりです。

吉野山は世界文化遺産に登録されたところです。その山の中心的なお寺にお勤めなさっていた田中利典さんをお願いしています。田中さんは修験者でもあり、かつて修験道の間でもあった冠着山に、一緒に登ってもらいます。さらしなの里のシンボルである冠着山を、田中さんの視点から語ってもらう予定です。冠着山登山はあらかじめ予約が必要です。さらしなルネサンスは今後、「美しささらしな」を合い言葉に活動します。当地には、世界に誇れる景観、文化の美しさがあります。

(芝原区・大谷善邦)

森と生きるアフリカの民族 Baka

信大・分藤大翼先生が講演会



私は、毎年行われる、さらしなの里歴史資料館の講演会を楽しみにしている。

今年、信州大学の分藤大翼先生(文化人類学)による「森と人との共存世界」のお話で、大変に興味深かった。アフリカのカメラン共和国とコンゴ共和国北部に連なるバカ(Baka)に住む人たちの生活を中心に、興味深く話され

た。

バカに住む人たちは狩猟採集活動を中心に生活している。森は、食料だけでなく、生活用具や薬を得る場所であり、自らが死後帰って行く場所である。彼らの音楽は、獲物をおびき寄せるための多声音楽(合唱)であるように、すべてが生活に結びついている。獲物が手に入ると皆で喜び合い、獲物の所有者は分配者になり、獲物を平等に分ける権利と義務がある。

基本的にあまり将来のことは気にしないし考えない。大人になったら、親のようになる。別の生き方をしたくないらしい。そんな日常の生活とは違う生き方をする民族の生き様を興味を持って聞いた。

(文)上徳間・齋間敏夫
写真Ⅱ羽尾四区・北村主計



春に食べれば1年元気 明徳寺の知恵団子



更級地区の明徳寺（羽尾四区）では、お釈迦さまが誕生した日を祝うお花祭り（知恵団子と呼ばれる手づくりの団子（左上の写真）がふるまわれます。ことしのお花祭りは4月12日の日曜日。お寺周辺のお宅の女性たちのグループ「ひまわり会」が中心になって朝からつくることに、ご一緒させてもらいました。

知恵団子という名前は、別所温泉の北向観音で参拝者にまかれる紅白のだんごをヒントに作り始めたそうです。知恵団子の前は、やしうまを作っていました。やしうまはお釈迦さまが亡くなったときの食べ物なので、知恵団子に変えました。北向観音では、これを食べると、頭も良くなると受験生にも人気だそうです。明徳寺では、これを食べると、1年間元気に暮らせる縁起物にもしています。

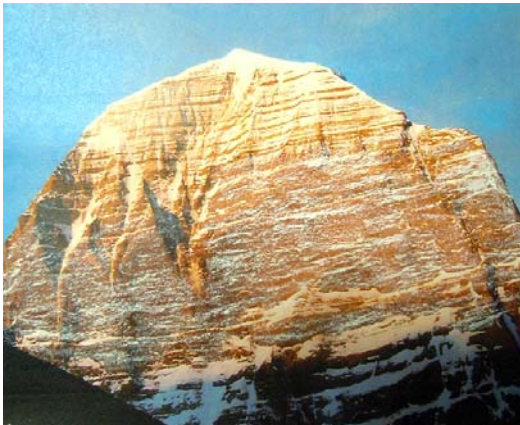
お花祭りは昼過ぎ、白い象を子どもたちが中心になつて引つ張

ることから始まり、甘茶をかけられるのを待つお釈迦さまの像がお迎えします。その前の午前8時、十数人のご婦人が明徳寺の庫裡に集まり、お寺に寄進されたお米をすった米粉で作り始めました。お湯や片栗粉、さらに塩と砂糖の加え加減で硬さも味も変わります。みなさんが言いたいことを言い合いながら、なんとなく分量が決まります。こねてふかしてさますとみんなで丸める作業、ちぎる人、片栗粉にまぶす人、見事な分業、連携です。2時間ほどでピンポン玉大の白2個、赤1個入りの袋が300もできました。ほの甘くてほのしよっぱい上品な味。本堂での御詠歌や読経、さらに演芸のお楽しみの後、みなさんにふるまわれました。（芝原区・大谷善邦）



おらほの冠着 31

冠着山の実像に迫りたい



標高6656m、中国チベット自治区ヒマラヤ山系に位置する独立峰カイルス山（写真左）。チベット仏教、ボン教、ヒンズー教などの聖地とされ、五体投地による信仰心の厚い巡礼者が多く訪れる聖山である。

私のなかで、このカイルス山と更級の「冠着山」がだぶって

更級のカイルス、密教法具の意味は？

さらしなの里歴史資料館の創設にかかわった千曲市の学芸員、翠川泰弘さんがこの4月、再び資料館の仕事を任せられました。平成22年に離任した後は、稲荷山の蔵の町並みを国の重要伝統的建造物群保存地区に選定する大役を果たしました。編集委員会では、翠川さんにこれからやりたい仕事を書いてほしいと依頼、原稿を寄せてくれました。



しまう。

古代からの聖地とされ、信仰の山として崇められてきた冠着山。カイルス山と山体の形状さえもが類似して見えてしまう。

冠着山の麓、扇平遺跡からは、保存状態の良い密教法具

のセット（写真中央）が出土している。戸倉町誌でも紹介されているが、元京都国立博物館の久保智康教授に実見いただいたことがある。平安時代末から鎌倉期にかけての所産と推定され、密教法具としてかなり貴重な資料であると評価できるとのことであった。

出土地は、経塚等の祭祀遺跡の可能性もあるが、あるいは、密教寺院の存在も否定できないと語った。地図上では、大きな平坦地は確認できないが、壇状を呈するテラスが連続して検出できれば、その可能性も大きいと指摘する。

現地踏査にも訪れたそうであるが、残念ながら時間がなく出土地までは到達できなかったとのことである。

多くの伝承を持ちながらも実像のつかみ難い冠着山。密教法具出土の意味する内容は深い。

扇平遺跡周辺の地籍名、地形、伝承等すべての情報を網羅して実態の究明にあたりたい。具体的な冠着山の実像に迫れるものと確信している。

（翠川泰弘）

〈編集後記〉冠着橋が掛けかわりました。渡し船の時代を経て、だ

んだんと成長してきた様子が分かる珍しい橋。お金の問題で更級郡と埴科郡の両岸には渡せず、河川敷に木橋をおろしていた時代もありました。更級小学校の「冠着橋調査隊」に歴史が受け継がれてうれしいです。新冠着橋は歩道部分がちやんとでき、安心して歩けるのもありがたいです▽今年の明徳寺のお花祭りは多くの子どもたちの参加があり、みなさん楽しんでました。知恵団子もよく効くでしょう▽資料館学芸員に復帰した翠川さん、冠着山への好奇心に火がついたようです。楽しみです。



さらしなの里歴史資料館の新スタッフ
青木友樹子さん

編集・発行

さらしなの里友の会だより

編集委員会

（事務局・さらしなの里歴史資料館）

T389-0812

長野県千曲市大字羽尾247の1

電話 026(276) 7511

Fax 026(261) 4161